

本学会長、甘粕健先生のご逝去について

すでに新聞などで報道されているように、去る8月4日(土)午前1時42分、本会の会長であり新潟大学名誉教授の甘粕健先生が逝去されました。81歳でした。

甘粕先生は、若い時から古墳研究と文化財保存運動に精力的に取り組み、1970年に本会の母体である文化財保存全国協議会(文全協)が結成された時には事務局長に就任。以来、代表委員をつとめるなど、日本の文化財保存運動の最前線でリーダーシップをとってこられました。1977年に新潟大学に着任すると、それまで古墳文化の空白地帯だった越後平野の古墳探査と調査・研究を進め、多くの成果をあげます。それ



和島賞を受賞(2005年5月)

と同時に、1984年の中郷村(現、上越市)籠峰遺跡の保存運動を皮切りに、見附市耳取山遺跡群、新津市(現、新潟市)八幡山遺跡、和島村(現、長岡市)八幡林遺跡、上越市裏山遺跡など、多くの遺跡の保存運動に取り組みました。

1996年、先生の呼びかけで新潟県内に住む文全協会員で組織されたのが、文化財保存新潟県協議会(文新協)です。当時、60名程となっていた県内の文全協会員がともに学習活動に取り組み、相互に交流を深め、遺跡保存に継続的に取り組む組織としたい、という先生の願いが発端でした。以来、先生は、本学会長として陣頭指揮を執り、遺跡の保存運動だけでなく、広く市民を対象とした学習会(講演会や見学会、古代まつりなどのバラエティーあふれる取り組み)を企画し続け、新潟の考古学ファンの裾野を広げることに尽力されました。そうした活動の結果、文新協の会員(新潟県に住む文全協会員)は一時、100名以上を数え、80名前後となっている現在でも全国で東京都に次いで2位を誇ります。こうした幅広く市民を巻き込む“新潟方式”の活動が評価され、本会は2004年、第5回和島誠一賞(団体の部)を受賞、ご自身も、長年の文化財保存運動への貢献が評価され、翌2005年には第6回和島誠一賞(個人の部)を受賞されました。

こうした文化財保存に関わる活動に加え、日本考古学協会の会長として旧石器遺跡ねつ造問題の調査・解明の陣頭指揮にあられたこと、新潟市歴史博物館(みなとぴあ)初代館長として、市民に開かれた博物館を県都新潟市に根付かせたことなど、先生の功績は数知れません。

先生は、昨年11月の本会主催の遺跡見学会「越中・加賀の遺跡最新情報!!～弥生墳墓・古墳・城跡を訪ねる～」のアウトラインを企画。富山・石川両県で遺跡の調査・研究の最前線で活躍する教え子達に案内を任せ、ご自身も先頭に立って古墳に登っていました。それから時を経ずして体調を崩されましたが、市民向けの講座や講演会には手を抜かず、ご自身の責務を果た



第3回の場古代まつり(2002年8月)

なお、本会事務局メンバーを中心に実行委員会を結成し、新潟市歴史博物館（みなとびあ）の全面協力を得て、先生のお別れの会を計画しています。多くの皆様のご参加をお待ちしています。

(事務局)

そうと努力されました。しかし、3月には入院。その後、一時奇跡的な回復を見せたものの、最後はご自宅で奥様、文新協の事務局メンバーが見守る中、静かに旅立たれました。

新潟のみならず、日本の文化財保存運動のリーダーであった大きな柱を失うことになりましたが、先生のご遺志を引き継ぎ、本会の発展に向けて努力していきたいと考えます。皆様のますますのご協力をお願い申し上げます。

甘粕健先生 お別れの会のご案内

私たちの敬愛する甘粕健先生が、8月4日にご逝去なさいました。翌5日には、奥様、ご親族ほかにより密葬が執り行われました。

先生はご生前、ご自身は無宗教なので多くの方々に見送って欲しい、とのご希望をお持ちでした。そこで奥様ともご相談し、より多くの方々とともに先生とお別れする機会を持つことを考えました。そしてこのたび、下記のように「甘粕健先生 お別れの会」を催すことといたしました。ご生前親しくお付き合いいただいた方、および先生の薫陶を受けた者が、一堂に会して、在りし日の甘粕先生との思い出を語り、先生をお送りしたいと存じます。

ご多用中のところ、誠に恐縮に存じますが、皆様お誘い合わせのうえ、何卒ご出席賜りたく、謹んでご案内申し上げます。

お別れの会実行委員会

代表 小林 昌 二

記

- 1、日 時 2012年9月17日（月曜日・敬老の日）
午後1時より 受付開始
午後2時より セレモニー（お別れの会）
午後3時より 懇談の席（先生を偲ぶ会）
- 1、場 所 ホテルイタリア軒 3階 サンマルコ
（新潟市中央区西堀通7番町 電話 025-224-5111）
- 1、会 費 A 2,000円（セレモニーのみご参列の方）
B 8,000円（セレモニーおよび懇談の席にご参会なさる方）

会場準備の都合上、ハガキにて、ご住所・お名前・電話番号：AかBかをご記入の上、
9月6日（木）までに下記へお知らせください。

なお、誠に勝手ながら、お香典・お供物はご辞退申し上げます。当日は、平服にてお越しいただきますようお願いいたします。ご連絡の不十分な点をお詫び申し上げるとともに、ご周知方、重ねてお願い申し上げます。

連絡先 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10 新潟市歴史博物館内
甘粕健先生 お別れの会 実行委員会 担当 小林隆幸
電話 025-225-6111 ファックス 025-225-6130

初めての海外、そして2泊3日の遺跡見学会、大成功！

雄大な歴史と海を越えた交流を体感した韓国の旅

暑い日が続いた今年の夏。8月17日（金）から19日（日）の3日間、いよいよ文新協初の海外見学会となる「魅惑の韓国・古代遺跡を訪ねる旅～ソウル・江華島を中心に～」を実施しました。新潟空港発ソウル行き大韓航空機に乗り込んだ参加者は総勢14名。中には隣県・群馬や佐渡からの参加者もおられました。

韓国・仁川空港では、旅行社の現地ガイドとともに韓国の女性研究者がお出迎え。今回の韓国ツアーのご案内をお願いした千羨幸さん（全北大学校研究員）です。千さんは韓半島の新石器時代の土器を研究されており、日本の立命館大学に大学院生として留学した経験をお持ちです。日本語もお上手で日本の事情にも明るく、3日間の見学を全面的にサポートして下さいました。

1日目はソウル市内の百済王朝時代の遺跡を巡りました。ロンドンオリンピックの興奮はまだ冷めませんが、1988年にソウルでオリンピックが開かれた際のメイン会場が遺跡のまん中にあるということはあまり知られていません。そのオリンピック公園に隣接する地域には多くの古墳群がありますが、私たちがまず訪れたのは石村洞積石塚です。ビルに囲まれた公園の中には石積みの古墳や土を盛った日本でもおなじみの古墳、そして、木棺墓が点在します。中でもひととき目を引くのが、墓全体を石で築いた高句麗系の積石塚で、3号墳と呼ばれるこの古墳（4世紀後半ごろ）は一辺50メートルの方形で、高さも4.5メートルと巨大です。1916年の調査当時には90基ほどの古墳が残されていたといいますが、いまは百済古墳公園の中に6基を残すだけとなっています。

次の見学地は、オリンピック公園内に今年4月にオープンしたばかりの漢城百済博物館です。実はこのオリンピック公園自体が初期百済の王城と考えられる夢村土城を取り込んでつくられています。南北長730メートル、東西長540メートルの平面不整形の土城は、それを取り囲んでいた城壁が土塁状の高まりとして残されています。漢城百済博物館は、夢村土城に隣接してつくられた、韓国の歴史上初めてソウルを首都とし約500年の歴史を築いた百済漢城期（前18年～475年）を中心に、ソウルの古代の歴史と文化にスポットを当てた博物館です。入ってすぐに目を引くのは風納土城の城壁の断



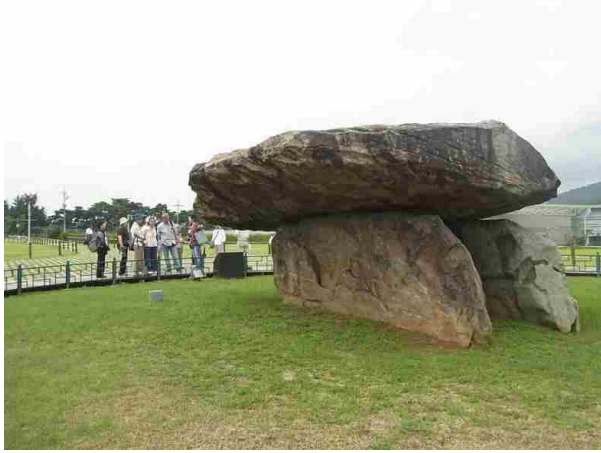
百済系の積石塚、石村洞4号墓前で



夢村土城の城壁を登る

面を切り取った巨大なはぎ取り資料です。その大きさに圧倒されながら進むと、百済と日本の交流を物語るおなじみの七支刀（奈良県石上神宮）のレプリカや数々の遺物・ジオラマによって悠久の歴史が紹介されます。

もう一つの王城である風納土城は夢村土城の北側に近接し、漢江の南岸に接しています。こも約3.5キロメートルをはかる城壁の一部が残されており、その面影を偲ぶことができます。



圧倒的な存在感を持つ江華支石墓



鰲上里支石墓群



北朝鮮を近くに臨む江華平和展望台

さて、2日目はソウル市を離れ江華島に向かいます。ここは教科書でもおなじみの「江華島事件」など、近代の歴史の中で日本など諸外国との衝突の舞台となったところですが、世界遺産である支石墓が集中するところとしても有名です。ソウルから江華島に向かう道路は漢江の左岸を下っていきますが、その川岸に張り巡らされた鉄条網が、国境の緊張感を高めます。

朝鮮ではコインドルと呼ばれる支石墓の代表的なものは、富近里地区にある「江華支石墓」です。高さ2.6メートル、長さ7.1メートル、幅5.5メートルで、テーブル状の石の重さは80トンを量るといいます。広い台地にポツンと立つ支石墓の圧倒的な存在感に、参加者一同は魅了されました。近接する江華歴史博物館は、こちらもオープンしたてのモダンな建物ですが、江華島の豊かな歴史を紹介しています。島内にはほかにも支石墓群がありますが、今回はそのの一つ鰲上里支石墓群も訪ねました。こちらは丘陵上に大小9つの支石墓が集中する様子を見ることができました。

せっかく江華島まで来たのだから・・・と、参加者の要望を取り入れて見学したのが江華平和展望台です。途中、軍の検問を抜けてバスは島の北端を目指します。ここから海峡越しに臨む陸地は、北朝鮮。2008年にオープンしたここは最も北朝鮮に近い展望台といわれています。朝鮮戦争に始まる南北朝鮮の悲しい歴史を語る展示は、ハングルを読めない日本人の胸にも深く突き刺さります。3階の展望室からは、備え付けの双眼鏡（有料）で北朝鮮の普通の暮らしを眺めることができます。田圃の中を歩く集団、

それを追い越す自転車…。韓国とはまったく違う暮らしを垣間見ることができました。

このほか、江華山城（13世紀前期、モンゴルに抗戦するために築かれた高麗の王都）の城門、江華島事件の舞台ともなった草芝鎮（1656年に設置された砲台）などを訪ね、島の歴史を堪能しました。

旅の最終日、3日目は再びソウル市内です。まずは2005年にオープンした国立中央博物館です。予定時間は1時間半。まずは、全員で3階の「彫刻・工芸館」へ。お目当ては韓国の国宝「半跏思惟像」です。これは日本の広隆寺のそれとの類似性が指摘されていますが、そんな貴重な像をじっくりと見ることができました。その後、一同は1階へ戻り、千さんの説明で「先史・古代館」を見学しました。しかし、見るものが多すぎます。1時間を過ぎたところで、1階の10分の1しか見ていないことに気づいた私たちは、ここで散り散りバラバラに…。その後は思い思いに見学したり、ミュージアムショップで買い物したり。しかし時間がまったく足りません。各自、「また今度！」と決意したことでしょ。

もう一つの見学地は、朝鮮王朝第二の王宮である、世界遺産・昌徳宮です。こちらも時間は限られていましたが、ベテランガイドさんの説明で朝鮮王朝の雄大な歴史やその裏側を垣間見ることができました。

飛行機に乗るまでの残されたわずかな時間は、ソウル中心地で本屋さんに立ち寄ったり、ソウル市民の憩いの場となっている清溪川（2005年、高架道路が撤去され約30年ぶりに復元された川）の風景を楽しんだり、思い思いに過ごすことができました。

3日間の食事も、石焼きビビンバ、骨付きカルビ・冷麺、参鶏湯、海鮮鍋・チヂミ、プルコギと、現地の千さんも「こんな料理は毎日食べない」という豪華な物ばかり。食の面からも韓国を堪能しましたが、少し体重計が気になりましたね。

甘粕会長が逝去されるという中むかえた見学会でしたが、亡き会長がこの旅行の実現を楽し



江華山城の城門



千さん(中央)の説明で国立中央博物館を見学



最後の見学地、昌徳宮

みにしていたこともあり、予定通りの実施となりました。初めての海外見学会で、行き届かないところもありましたが、現地のお二人のガイドさんとすばらしいバスの運転手さん、そして参加された方々のご協力で、とても充実した見学会とすることができました。「もう一度韓国へ！」という声もあがっていますが、次回の見学会にもご期待ください。 (木村英祐)

----- **【参加者の感想】** -----

部外者も十分楽しめ、有意義な内容でした。韓国には何度か行きましたが、重複するところが少なかったです。国立中央博物館は、2度目でもゆっくり見られず、ものづくりの立場から、焼き物と金属のコーナーを駆け足で見ました。もう少し時間が欲しかったです。

はじめての韓国旅行が文新協の旅で、本当によかったと思っています。歴史や文化に触れることのできた、貴重な3日間でした。千先生、ガイドさん、運転手の方の深い知識と強い個性・技術で、楽しく、ぜいたくなひとときでした。

文新協なるものが何であるかも知らず、参加させていただきました。細部の文字を読まなくても、物を見るだけで(名解説付きで) Goodでした。百聞は一見にしかず。

2泊3日の長くない旅の中で、初期百済王朝形成期の古墳と共に、風納・夢村土城を見学できたことは得難い成果でした。次に、世界に広がる支石墓の見学では、青銅器時代のイメージを具体的に得られて幸いでした。近代日本の負の遺産も現地で学べたことも、有意義でした。

政治的に難しい時に、現地のガイドさん達の気遣いも、前に来た博物館と同じでも、日本軍などの説明をはぶき、心遣いを感じました。文新協の旅行は、古墳など同じ興味の皆様とご一緒に、色々な刺激を受け、これからもう少し私自身も自分のために、歴史を楽しめるように勉強したいなあと思いました。思いがけず、北朝鮮の見える丘も見学でき、幸いでした。

「近くて遠い国」朝鮮が身近に感じられ、日本のルーツを学ぶ旅になりました。欲を言えば、歴史博物館の見学時間をもっと長くって頂ければよかったですと思います。

なかなかツアーで行けないところ、しかも興味のあるところを、ガイド付きで見学できて、大変ぜいたくな旅だと思います。思い切って参加してよかったです。平和展望台も良かったです。

編集後記

甘粕健会長がご逝去なさいました。あの“甘粕スマイル”を見ることは、もうできません。9月17日にはお別れの会が予定されています。多くの方々にご参加いただきたいと思います。

また、文新協としては初めての海外への見学旅行は、好評のうちに終了することができました。韓国への旅行は、甘粕会長も楽しみにしていました。今後も、甘粕会長のご遺志を引き継ぎ、市民に開かれた活動を展開していきたいと考えます。

この『会報』は文全協会員でなくても、文新協行事に参加された方には、可能な限りお送りしています(ご参加なき場合は郵送を取りやめる場合があります)。名簿は本会からの連絡にのみ使用し、個人情報保護に留意し厳正に管理しています。会報送付がご迷惑な方は、事務局までご一報下さい。

文化財保存新潟県協議会事務局 (入会についてのお問い合わせも)

ホームページ : <http://www10.ocn.ne.jp/~bunsin-k/>

E-mail : bun-sin-kyou@js8.so-net.ne.jp